

<報告>

ゲーテの詩による歌曲の諸相

—長島剛子・梅本実リートデュオ・リサイタル ロマン派から20世紀へ Part II—

The Various Aspects of Songs by Poetry of Goethe

—Takeko Nagashima & Minoru Umemoto Lied Duo Recital from Romantic to 20th Century Part II—

長島 剛子

NAGASHIMA Takeko

本稿は2019年秋に札幌（10月6日 13時30分開演 ザ・ルーテルホール）と東京（10月10日 19時開演 東京文化会館小ホール）で開催した「長島剛子・梅本実リートデュオ・リサイタル ロマン派から20世紀へ Part II（ゲーテの詩による歌曲）」の報告及び、プログラム・ノートに加筆・再構成したものである。シリーズ第2回となるこの演奏会では、ドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの詩に付曲された歌曲を集めてプログラムを組んだ。1999年、ゲーテ生誕250年の記念年にゲーテ歌曲を集めてリサイタルを開催したが、その後現在までの20年間、演奏会等で折に触れゲーテ歌曲を取り上げ、彼の歌曲に対する理解は随分深まってきたように感じている。今回は委嘱新作を含め、現代におけるゲーテ歌曲の一つの姿を提示する。

キーワード：ゲーテ、詩、歌曲

1. はじめに

2017年にスタートした「長島剛子・梅本実リートデュオ・リサイタル ロマン派から20世紀へ」のシリーズ第2回となるこの演奏会では、詩人ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテに焦点を当て、彼の詩に付曲された歌曲を集めてプログラムを組んだ。1999年、ゲーテ生誕250年の記念年に彼の詩による歌曲を集めてリサイタルを開催したことがあるが、その後現在までの20年間、演奏会等で時折取り上げ、ゲーテ歌曲のレパートリーを増やしてきた。ロマン派以降数々の作曲家が彼の詩に付曲を試みているが、今回は委嘱新作を含め、現代におけるゲーテ歌曲の一つの姿を提示する。

2. リサイタルの概要

長島剛子・梅本実リートデュオ・リサイタル ロマン派から20世紀へ Part II 〈ゲーテの詩による歌曲〉

2019年10月6日（日）13時30分開演 ザ・ルーテルホール（札幌）

2019年10月10日（木）19時開演 東京文化会館小ホール

演奏：長島剛子（ソプラノ）、梅本実（ピアノ）

<プログラム>

リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864-1949)：〈見つけたもの〉 *Gefunden* Op.56-1.

フェリックス・メンデルスゾーン Felix Mendelssohn (1809-1847)：〈恋する少女の手紙〉 *Die Liebende schreibt* Op.86-3.

クララ・シューマン Clara Schumann (1819-1896)：〈すみれ〉 *Das Veilchen*.

アントン・フォン・ヴェーベルン Anton von Webern (1883-1945) : 〈花の挨拶〉 *Blumengruss*.

エドワルト・グリーグ Edvard Grieg (1843-1907) : 〈バラの咲く時に〉 *Zur Rosenzeit* Op.48-5.

フランツ・シューベルト Franz Schubert (1797-1828) : 〈月に寄せて〉 *An den Mond* D 296.

フランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886) : 〈喜びも悲しみも〉 *Freudvoll und leidvoll* S 280.

ハンス・アイスラー Hanns Eisler (1898-1962) : 〈ゲーテ断章〉 *Goethe-Fragment*.

アレクサンダー・ツェムリンスキー Alexander Zemlinsky (1871-1942) : 〈妖精の歌〉 *Elfenlied* Op.22-4.

フランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886) : 〈全ての山の頂きに安らぎが〉 *Über allen Gipfeln ist Ruh* S 306、〈天から来たあなたは〉 *Der du von dem Himmel bist* S 279.

休憩

伊藤 祐二 Yuji Itoh (1956-) : 《ゲーテの4つの詩による歌曲》 *4 Poems by J. W. v. Goethe*.

中国風ドイツ暦 第1番、第2番前半及び第8番 Aus *Chinesisch-Deutsche Jahres- und Tageszeiten*.
リーナに *An Lina*.

至福の憧れ *Selige Sehnsucht*.

全ての山の頂きに安らぎが *Über allen Gipfeln ist Ruh*.

フーゴ・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903) : 《ミニョンの4つの歌》 *Lieder der Mignon*.

ミニョン第1曲 (語らずともよいと言ってください) *Mignon I (Heiss mich nicht reden)*.

ミニョン第2曲 (ただ憧れを知る人だけが) *Mignon II (Nur wer die Sehnsucht kennt)*.

ミニョン第3曲 (もうしばらくこのままの姿に) *Mignon III (So lasst mich scheinen)*.

ミニョン (君よ知るや南の国) *Mignon (Kennst du das Land)*.

3. プログラムについて

この項では当日配布したプログラム・ノートに加筆・修正したものを提示するが、通常の楽曲解説とは違い、詩と詩人についてのエピソードを中心にしたものになっている。

リヒャルト・シュトラウス (1864-1949)

見つけたもの Op.56-1 1903年作曲 (原詩: 1813年)

ゲーテは生涯に一度結婚したが、その相手であるクリスティアーネとの出会いを回想して詠ったのがこの詩である。最初の出会いから25年経った1813年に旅先のイルメナウから彼女に贈った。このエピソードを知ってか、R.シュトラウスも結婚10年後にこの詩に作曲し、彼の妻パウリーネに捧げている。

フェリックス・メンデルスゾーン (1809-1847)

恋する少女の手紙 作品86-3 1831年作曲 (原詩：1807年)

この詩はゲートが1807年にイエーナに滞在した際、その町の書店の養女であった18歳のミンヒェン・ヘルツリープへの愛が急に燃え上がった結果誕生した17編からなる『ソネット』集から取られている。メンデルスゾーンは1821年12歳の時に、師ツェルターを通してゲートに初めて紹介された。ゲートは才気溢れる少年フェリックスを大変気に入り、その後何度もヴァイマルの自宅に招き歓待した。

クララ・シューマン (1819-1896)

すみれ 1853年作曲 (原詩：1773年頃)

モーツァルトの付曲で有名な〈すみれ〉は2019年生誕200年を迎えたクララ・シューマンの唯一のゲート歌曲である。彼女もメンデルスゾーンと同じく12歳の時 (1831年) ヴァイマルのゲート宅で演奏した。天才少女ピアニストとして活動を始めたばかりのクララの演奏をゲートは絶賛し、彼の肖像入りのメダルをプレゼントした。

アントン・フォン・ヴェーベルン (1883-1945)

花の挨拶 (8つの初期の歌より) 1903年作曲 (原詩：1810年)

この詩は1810年にゲートが滞在したボヘミア地方の温泉町カールスバートかテプリッツ (2年後にあのペーターヴェンと邂逅することになる) で書かれたらしい。このかわいらしい恋愛詩はツェルターの作曲の為に作られたが、H.ヴォルフ他の作曲家も付曲している。ヴェーベルンが師シェーンベルクと出会う前の20歳の時の作品で、まだロマン派風の和声に拠っている。

エドワルト・グリーグ (1843-1907)

バラの咲く時に Op.48-5 1889年作曲 (原詩：1775年)

歌劇《エルヴィンとエルミーレ》第二幕第一場冒頭にエルヴィンによって歌われる詩である。ゲートはこの年フランクフルトの銀行家の娘リリー・シェーネマンと知り合い、4月に婚約した。しかし家柄の違い、そして何よりも結婚による拘束を恐れ秋には婚約を解消することになる。この詩にはリリーとの愛と別れの苦しみが投影されているが、ゲートは自伝『詩と真実』の中で「思いだしても耐え難い苦悩をこれらの詩を書くことでいくらか慰めた。」と述べている。

フランツ・シューベルト (1797-1828)

月に寄せて D 296 1815年か1816年作曲 (原詩：初稿1777年夏? 決定稿1787-89年)

ゲートのヴァイマル時代の詩。月で歌われているのは、初稿では7歳年上の人妻で彼の最大の理解者シュタイン夫人のことだった。彼女との関係が決裂した後の決定稿では「最愛の女性の目 der Liebsten Auge」が「友人の目 des Freundes Auge」に変えられている。イルム川の流れる広大な緑地の中にゲートが住んだガルテンハウスが今もポツンと残されており (プログラム冊子の表紙写真)、当時の風情を感じることが出来る。

フランツ・リスト (1811-1886)

喜びも悲しみも S 280 (第2稿) 1849年作曲 (原詩：1775年頃?)

この詩は戯曲『エグモント』第二場の冒頭で歌われるクレールヒェンの歌だが、前述のグリーグ〈バラの咲く時に〉同様リリーへの恋の喜びと悩みとに密接に結びついている。リストの歌曲はそれほど多く演奏されないが、ピアノの大変美しい前奏、後奏が印象的である。なおこの詩には作曲者自身による3種のバージョンが存在

する。

ハンス・アイスラー (1898-1962)

ゲーテ断章 1953年作曲 (原詩：『西東詩集「ズライカの書」』より〈余韻 Nachklang〉の一部 1815年)

この詩は『西東詩集「ズライカの書」』の〈余韻〉から採っている。アイスラーは1898年ライプティヒに生まれ1962年にベルリンに没した20世紀ドイツを代表する作曲家の一人。一時シェーンベルクに師事したが後に袂を分かち「政治」に密着した創作活動を行い、一般大衆向け音楽を作り出すことに力を注いだ。生涯に亘り歌曲を創作し、テキストを抒情詩から新聞の切抜記事まで広範に選択している。

アレクサンダー・ツェムリンスキー (1871-1942)

妖精の歌 作品22-4 1934年作曲 (原詩：1780年頃?)

この詩は1780年頃、前述のシュタイン夫人に宛てた手紙の中に残されていた。シェーンベルクの師として知られているツェムリンスキーは歌曲を100曲程作曲しているが、この曲は中期以降の作品にみられる半音階的和声とガラス細工のような装飾的な繊細さが特徴であり、妖精のコケティッシュな表情の中に暗さと怪奇性が忍び込んでいる。

フランツ・リスト

全ての山の頂きに安らぎが S 306 (第2稿) 1859年以前作曲 (原詩：1780年)

天から来たあなたは S 279 (第1稿) 1842年作曲 (原詩：1776年)

この二つの詩は〈さすらい人の夜の歌〉として知られている。〈全ての山の頂きに安らぎが *Über allen Gipfeln ist Ruh*〉はゲーテが当時、時々夜を過ごしたキッケルハーンの山上の狩猟小屋の壁板に書いた。そして51年後の1831年8月、82歳の誕生日の前日にここを訪れこの詩を読み返して涙し、終わりの二行を繰り返し「ほんとうにそうだ」とつぶやいた、と伝えられている。〈天から来たあなたは *Der du von dem Himmel bist*〉はエッタースベルク山腹にて書かれ、シュタイン夫人に贈られた。

伊藤 祐二 (1956-)

ゲーテの4つの詩による歌曲 2019年作曲 (原詩：『中国風ドイツ暦』1827年、〈リーナに〉1790年代末、〈至福の憧れ〉1814年、〈全ての山の頂きに安らぎが〉1780年)

歌曲はとても好きだ。プーランクやデュパルク、ヴォルフの歌曲を聴いたり楽譜を眺めたりするのは楽しい。しかし、自分が書くとなると、話は別だ。詩は、その言葉の意味、その音の魅力、ページ上の姿等、すべてが響き合って素晴らしいひとつの存在をなしている。詩人が、創作の苦しみをもって、それを成したはずだ。作曲は、それを壊す行為では？ 私はそれを畏れる。音楽を付して“詩の表現を拡張する”等と安易に考えられない以上、“詩に作曲する事とは”という問いから逃れることはできない。

それを解決する万能の“方法”をまだ私は見出していない。それは恐らく、私たちに多くある、“望んでも決して手に入らないもの”の一つなのだろう。今できる事は、その言葉の森の深くに分け入り、目を見開き、感嘆し、痛み、考え、そして耳を澄ます事。とても大変だけれど、それも又、無上の喜びなのだ。今回は、ゲーテの詩という依頼だった。全集(翻訳)にある詩はすべて読んだ。いくつかを選び、辞書を引いた。当然ながら、翻訳は全くの別物だった。もし、何年かかけてすべての詩を辞書を引いて読んだら、選択は変わっていたかもしれない。『中国風ドイツ暦』の一部、〈リーナに〉〈至福の憧れ〉〈全ての山の頂きに安らぎが〉を、続けて演奏し、全体としてひとつながりの曲として聴けるように書いた。この作曲の機会をくださった長島剛子さんに感謝しま

す。(自作解説：伊藤 祐二)

フーゴ・ヴォルフ (1860-1903)

ミニョンの4つの歌 1888年作曲

以下の4曲はゲーテの教養小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の中で、少女ミニョンが歌った詩に付曲された。ミニョンは、自分の出生について暗い過去を負い、幼いころ故郷から連れ去られ、異国の地で旅芸人の一座に身を投じている影のある少女である。

ミニョン第1曲 (語らずともよいと言ってください) (原詩：1782年以前?)

この第1曲は、彼女がたどってきた過酷な人生を人には決して打ち明けることができない宿命にあることを切々と訴える歌である。苦吟するように語られる歌のパートは「時が来れば日が上り」に始まる第2節で激しい高揚を見せるが、再び深い諦観の表情に沈んでいく。ピアノの半音階で動く微妙な和声の変化が、少女の繊細な内面を見事に描きだしている。

ミニョン第2曲 (ただ憧れを知る人だけが) (原詩：1785年)

「ただ憧れを知る人だけが、私の苦しみを理解できるのです！」に始まるこの有名な詩は、ミニョンと半ば狂気の放浪の豎琴弾き(実はミニョンの父)が調子はずれの二重唱ながら情感豊かに歌い上げた詩である。ドイツ・ロマン派のキーワードの一つである「憧れ」は、「それを激しく希求するが、決して到達することはできないもの」という概念があり、日本人がイメージする受動的で夢見るような「憧れ」とはやや違う意味合いを持っているように思われる。

ミニョン第3曲 (もうしばらくこのままの姿に) (原詩：1796年以前?)

すでに精神に変調を見せ始め、養護施設に収容されたミニョンは、誕生日を迎えた双子の姉妹のパーティーでプレゼントを渡す天使の役に選ばれる。裾の長い白い服に金色の翼や冠をつけ天使さながらの装いで少女たちを驚かせた彼女は、本当に天に帰る日までこの姿のままでありたいと願い、チターを手でテーブルに腰をかけてこの詩を優美に歌い始める。同じ詩に付曲したシューベルト、シューマンが長調で作曲したのに比べ、この作品は短調で書かれ、よりいっそう薄幸なミニョンの運命が浮き彫りにされている。

ミニョン (君よ知るや南の国) (原詩：1782-83年)

これはミニョンが彼女の故郷であるイタリアへの強い憧れと、新しい保護者となったヴィルヘルムに対して寄せ始めた思慕の気持ちを情感こめて歌った詩である。三節からなり、第一節は、レモンの花が咲きオレンジが実る官能的な南国の風景、第二節は彼女が生まれ育った貴族の館、第三節は北国に連れ去られた際に、越えなければならなかった険しいアルプスの印象が歌われている。一節ごとに、「愛する人 Geliebter」から「護ってくれる人 Beschützer」そして「父なる人 Vater」とヴィルヘルムに対する呼びかけが変わっていくのが印象的で、4曲のなかで最も壮大で劇的な作品である。

4. リサイタル当夜の報告

前半の第1ステージでは、6人の作曲家によるゲーテ歌曲を選んだ。ゲーテが妻クリスティーアネとの出会いを回想して書いた詩にR.シュトラウスが付曲した〈見つけたもの〉に始まり、ゲーテと親交があったメンデルスゾーンとC.シューマンよりそれぞれ〈恋する少女の手紙〉と〈すみれ〉、そしてヴェーバー初期の歌曲〈花

の挨拶)、グリーグ〈バラの咲く時に〉と続き、最後に60曲以上のゲーテ歌曲を残したシューベルトの〈月に寄せて〉の6曲を演奏した。シュトラウスとヴェーベルン作品は20世紀に入ってからのものだが(両曲とも1903年作)作風的には他の4人の作曲家と同じロマン派の様式で書かれている。19世紀の間ゲーテは多くの作曲家から崇拝され沢山の歌曲が残されていたのだが、その一端を紹介した。前半の第2ステージではそれよりは少し新しい作風の3人の作曲家、リスト、アイスラー、ツェムリンスキーの5曲のゲーテ歌曲を演奏した。ピアノの巨人リストはゲーテ歌曲を6曲残している。今回その中から3曲を取り上げたが、そのドラマ性とピアノパートの美しさは特筆すべきで、特に前半最後に演奏した〈天から来たあなたは〉は聴衆には印象的であったようだ。

休憩後の後半最初に伊藤祐二氏の委嘱・初演作《ゲーテの4つの詩による歌曲》を演奏した。この作品は『中国風ドイツ暦』の一部、〈リーナに〉〈至福の憧れ〉〈全ての山の頂きに安らぎが〉の4つの詩を繋げ、全体としてひとつながりの曲として構成されたもので演奏時間も15分近く掛かる大作であった。西洋の作曲家の作品とは違う美意識に貫かれたこの作品から「演奏すること」自体を深く考えさせられた。最後にヴォルフの大作《ミニョンの4つの歌》を演奏した。

5. おわりに

会場には例年通り多くの聴衆が詰めかけ、アンコールまで熱心に聴き入って下さった。演奏されることが非常に稀な作品を含めたゲーテの詩による歌曲のプログラムが果たしてどのように聴衆に受け入れられるのか心配する部分もあった。特に委嘱作品である伊藤祐二氏の《ゲーテの4つの詩による歌曲》は手探りの状態からのスタートであったが、事前のリハーサル等で作曲家本人から有益なアドバイスを受け、ステージでは作曲者がゲーテの詩をどのように読み込んだのか、その過程を若干追体験出来たように感じた。シューベルト等に代表される有名なゲーテ歌曲しか聴いたことがない若い世代の聴衆からもこの作品に対する反響が大きかったことは思いがけない収穫であった。音楽雑誌『音楽の友2019年12月号』には「ポピュラーな作品と、知られていない作品を散りばめ、しかも聴衆を掴んで聴かせるのはもちろん容易ならざることだが、二人は見事に聴衆を楽しませた。…作品に対する演奏者の愛情が、この成果を生んだのだろう。」とこの演奏会の批評が掲載された。

昨年のヘルダリーンに続き、2年続けて詩人に焦点を当てた企画であったが、同じ詩人に様々な時代の作曲家が異なるアプローチをしていることを探求するのは大変興味深かった。今後も詩人を切り口にしてプログラミングをする演奏会は続けていきたいが、次の機会には他の詩人に焦点を当てた作品を集め、研究を進めたいと考えている。

謝辞

この演奏会は「2019年度国立音楽大学個人研究費(特別支給)」の助成を頂きました。ここに深く感謝の意を表します。